

# 広報 あかしいけ

12

○ 特集

「文化の回廊」を行く

まちを知る まちを見つめる 未来へつなぐ——



この町には、誇るべき文化がある。

次の百年に継ぎたい宝物がある。

まちを知り、まちを見つめると

そこに何かが見えてくる。

ここは私たちのふるさと赤池町。

赤池らしさに気づく

「文化の回廊」を旅してみよう。

● CONTENTS / 目次 特集「文化の回廊を行く」

<b>第一章 発見・まちの至宝物語</b>	4
興国寺開山 無隠元晦の志	5
古刹に宿る尊氏伝説	6
よみがえった千手観音	8
東光寺焼仏の残像	10
<b>第二章 発信・やきもの文化新時代</b>	11
上野と小石原	12
「和みのかたち」という提案	14
陶の里で出会う創造と感動	16
やきものをもっと身近に	18
進化する上野の遺伝子	20
<b>第三章 発展・福智に迫る</b>	22
知られざる文化探訪	23
『折躑躅』桃源の誘い	24
母樹と向き合う	26
レッドデータにある生命たち	28
懐に抱かれて	30
文化の回廊探訪マップ	32



P9



P21



P24

12 広報あかいけ No.503/2004, December

←重厚な山門の奥に静心池をはさんで本堂が見える。室町時代に足利尊氏・直義によって安国寺に指定された興国寺。今に伝わる寺宝は、まちが誇る宝である。(写真:天目山興国寺山門と横山哲志住職)

まずは「まちの正倉院」興国寺へ

東西南北貫つ戸

山河大地不曾荒

# まちの至宝物語

はるか遠い昔から、このまちには時間が流れている。  
その中で育まれた文化は、歴史として刻まれ、ごくわずかが形となり、今に残っている。  
歴史の証人である文化財、まちの宝に秘められた物語を探ってみよう…

## 興国寺開山、無隠元晦の志

【大海を越えた高僧が今に語りかけるもの】

今にも動き出しそうである。その骨肉の像は、意志あるかのごとく、見る者に迫ってくる。この世の全てを見据えたように空をにらむ目、への字に結んだ唇：生前の姿を彷彿とさせる像には霊気すら漂っていた。「無隠元晦坐像」。

南北朝時代の傑作として名高い肖像彫刻である。興国寺開山と仰がれる無隠元晦禪師は、弘安6年(1283年)に田川弓削田で生まれたと伝えられている。時は、動乱の絶えない鎌倉時代の末期。仏の道を進み、博多聖福寺で僧となつた元晦禪師は、常に高い志を持っていた。その意志は、いつしか禅師を文化と仏教の中心、元の国へと導いていく…

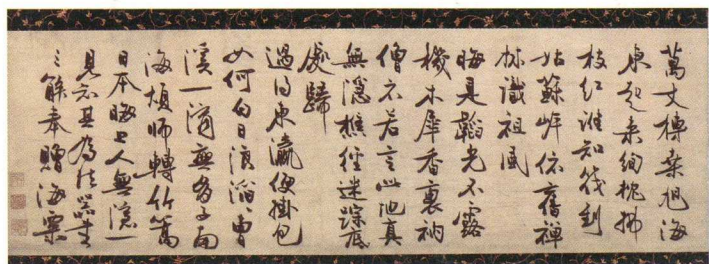
難破する確率が極めて高い、生死をかけた渡航に身あずけた元晦禪師。27歳のときに豊後の守護・大友貞宗の支援を受け、渡元したとされている。万里の荒波を越え、元の国にたどり着いた禅師は、中国大陸の広大な風土や華麗な文化に接した。やがて、天目山の名僧・中峰明本に師事し、厳しい修行を重ねる。めきめ



↑興国寺の開山堂に安置されている無隠元晦坐像。かつて地元では「興国寺の黒仏(くろぼとけ)様」と呼ばれ、夜になるとお寺の周囲を見回っていたという逸話が残っている。昭和31年に福岡県有形文化財に指定された。

きと頭角を現した元晦禪師は、元の国に名を馳せ、中峰禅師の法を継ぎ、その三哲のひとつりに数えられるまでになった。日本に帰国後は、京都建仁寺、筑前顕孝寺、博多聖福寺、京都南禅寺など各地の名刹に迎えられ、住持を歴任した。特に南禅寺は、官寺の最高位に君臨した寺である。臨済宗の高僧となつた禅師は、晩年、故郷の豊前に戻り、現在の赤池町上野の地で天目寺(のちの興国寺)を開いた。天目とは「いつでも己の行動を天が見ている」という意味で、禅師が修行した元の国の天目山に由来している。

元晦禪師は、はるか南北朝の時代から「志を高く持てば人に出会い、世界への果てしない視野が広がる」というメッセージを今に生きた私たちに投げかけている。



↑与無隠元晦詩(むいんげんかいにあたうし) / 東京国立博物館に所蔵されている国宝。元の文人、馮子振(ふうししん)が、無隠元晦禪師に七言絶句3首を揮ごうして贈ったもの。この他にも元晦禪師に与えた語が伝えられている。馮子振がいかに禅師を重んじ、また禅師が元の国で名を馳せていたかがうかがえる。(写真/東京国立博物館提供)

水晶のはめ込まれた目が生彩を際立たせる「無隠元晦坐像」の頭部側面

